

(4) 植生自然度

「第2回自然環境保全基礎調査報告書」(昭和58年、環境庁)に準拠し、調査範囲の現存植生の自然度を区分した。植生自然度区分基準を表5.2.8.7に、各群落の自然度及び占有面積を表5.2.8.8に示す。また、植生自然度を図5.2.8.5に示す。

表 5.2.8.7 植生自然度区分基準

植生自然度	概要	区分基準
10	自然草原 (自然草原・湿原)	高山ハイデ、風衝草原、自然草原等、自然植生のうち単層の植物社会を形成する地区(自然度9、自然度10は自然性の高さにおいて同じランク)。
9	自然林(極相林またはそれに近い群落構成を示す天然林)	エゾマツ・トドマツ群集、ブナ群集等、自然植生のうち多層の植物社会を形成する地区。
8	二次林 (自然林に近いもの)	ブナ、ミズナラ再生林、シイ・カシ萌芽林等、代償植生であっても、特に自然植生に近い地区。
7	二次林	クレーミズナラ群落、クヌギーコナラ群落等、一般には二次林と呼ばれる代償植生地区。
6	造林地	常緑針葉樹、落葉針葉樹、常緑広葉樹等の植林地。
5	二次草原 (背丈の高い草原)	ササ群落、ススキ群落等の背丈の高い草原。
4	二次草原 (背丈の低い草原)	シバ群落等の背丈の低い草原。
3	農耕地 (樹園地)	農耕地(樹園地、果樹園、桑畑)
2	農耕地 (水田、畑地)	水田、畑地等の耕作地。緑の多い住宅地(緑被率60%以上)。
1	市街地、造成地	植生のほとんど残存しない地区。

注) 植生自然度とは、植生に対する人為の影響の度合いにより、日本の植生を10の類型に区分したもので、値が小さいほど人為影響の度合いが大きいことを示す。

表 5.2.8.8 植生自然度別占有面積

植生自然度	凡例	調査範囲		実施区域		実施区域の周辺地域	
		面積 (ha)	割合 (%)	面積 (ha)	割合 (%)	面積 (ha)	割合 (%)
7	エノキ群落	0.31	0.09			0.31	0.11
	竹林 (マダケ)						
5	ヨシ群落	13.23	3.76	0.67	0.98	12.56	4.41
	オギ群落						
	マコモ群落						
	ミクリ群落						
	ススキ群落						
	メダケ群落						
	クズ群落						
	沈水植物群落						
4	ヤナギタデ群落	4.32	1.23	1.42	2.06	2.90	1.03
	コセンダングサ群落						
	メヒシバ-エノコログサ群落						
	休耕田雑草群落						
	湿生草本群落						
3	植栽樹種群	2.68	0.76			2.68	0.94
	果樹園						
2	畑地	181.65	51.56	47.53	69.09	134.12	47.41
	水田						
	人工草地						
	公園・グラウンド						
	社寺林・緑の多い住宅地						
1	住宅・構造物	139.60	39.63	18.29	26.58	121.31	42.72
	道路・新幹線						
—	開放水面	10.50	2.98	0.89	1.29	9.61	3.38
	合計	352.29	100	68.80	100	283.49	100

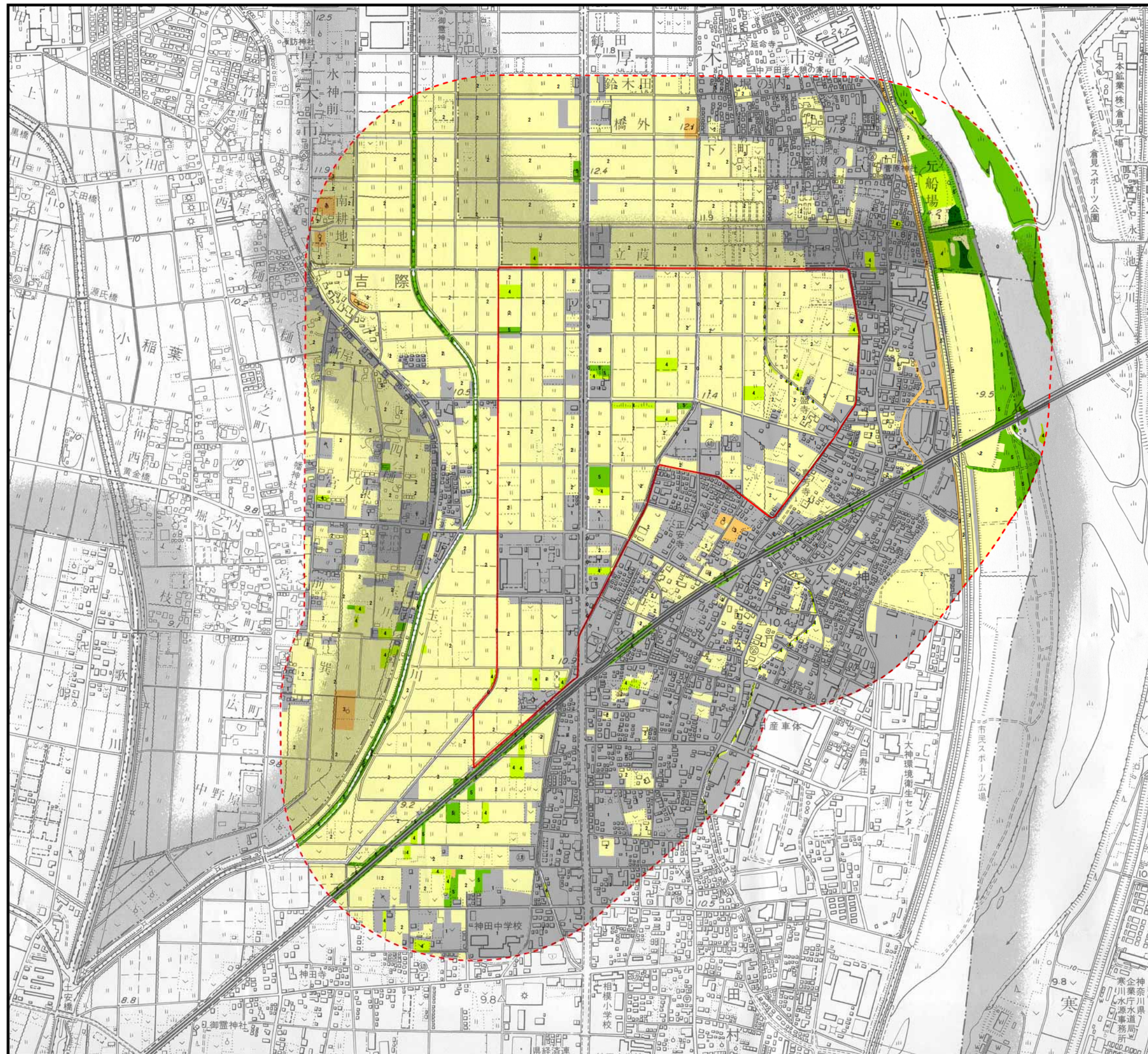
注) 1. ミクリ群落、沈水植物群落については、本来は自然度の高い立地に成立する群落であると考えられるが、調査範囲内では人工的な環境下での確認に止まったため、自然度5に区分した。

2. 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。

調査範囲の主な土地利用は水田を中心とした農耕地と、国道129号及び東海道新幹線沿線に広がる市街地である。

そのため、植生自然度2に区分される畑地や水田、人工草地等及び植生自然度1に区分される住宅・構造物等の占める割合は、それぞれ約52%、約40%と高く、調査範囲の9割以上が植生自然度2、あるいは植生自然度1に区分される結果になった。

また、自然度が高い群落（植生自然度8、9、10に該当するような群落）に区分される群落はなく、相模川河川敷や笠張川といった河川周辺等に自然度7に区分される二次林（エノキ群落：0.09%）や、自然度5に区分される二次草原（ヨシ群落、オギ群落等：3.76%）が小面積に分布する状況であった。



凡 例

- 実施区域
- 調査範囲

自然度

7	エノキ群落
	竹林 (マダケ)
5	ヨシ群落
	オギ群落
	マコモ群落
	ミクリ群落
4	ススキ群落
	メダケ群落
	クズ群落
	ヤナギタデ群落
3	コセンダングサ群落
	メヒシバ-エノコログサ群落
	休耕田雑草群落
	湿生草本群落
2	沈水植物群落
	植栽樹種群
1	果樹園
	畑地
0	水田
	人工草地
0	公園・グラウンド
	社寺林・緑の多い住宅地
1	住宅・構造物
	道路・新幹線
0	開放水面



Scale=1:10,000

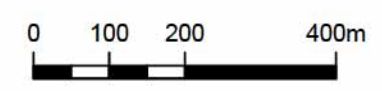


図5.2.8.5
植生自然度図

イ. 群落構造

植生調査を実施した群落及び植生調査地点の概要を表 5.2.8.9 に示す。また、各植生調査地点の植生の概要について以下に示す。

表 5.2.8.9 植生調査地点の概要

区分	凡例		植生調査地点 No.	調査実施時期		
				春季	夏季	秋季
植生区分	草本群落	ヤナギタデ群落	8			○
		コセンダングサ群落	1	○	○	○
		メヒシバ-エノコログサ群落	2			○
		ヨシ群落	3	○	○	○
			9	○	○	○
			10	○	○	○
		オギ群落	4	○		○
			11	○	○	○
			12			○
		マコモ群落	13			○
		ミクリ群落	—			
		ススキ群落	14			○
		休耕田雑草群落	5			○
			6			○
	7			○	○	
	15				○	
	木本群落	メダケ群落	16	○	○	○
		クズ群落	17			○
			18	○	○	○
		エノキ群落	19	○	○	○
竹林 (マダケ)	20	○	○	○		
幹線水路内 植生	湿生草本群落	23			○	
		24			○	
	沈水植物群落	—				
土地利用	土地利用	植栽樹種群	—			
		果樹園	—			
		畑地	—			
		水田	—			
		人工草地	21			○
		公園・グラウンド	—			
		住宅・構造物	—			
		社寺林・緑の多い住宅地	22		○	○
	道路・新幹線	—				
開放水面	開放水面	—				
合計			24 地点	10 地点	11 地点	24 地点

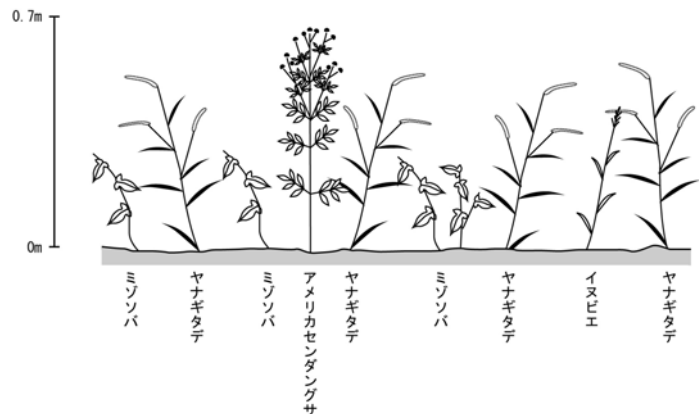
■ヤナギタデ群落 (St. 8)

一年草であるヤナギタデが優占する群落で、調査範囲内においては、相模川の砂礫地に成立していた。

【St.8】

調査地点は、実施区域の周辺地域の相模川に架かる東海道新幹線の鉄橋下に形成された砂礫地に成立したヤナギタデ群落である。

秋季調査時は、群落高は 0.7m、植被率は 70%で、ヤナギタデが優占していた。このほか、ミゾソバ、イヌビエ等が生育していた。全ての出現種は、湿地に生育する種で構成されていた。



St. 8の模式断面図 (秋季調査)

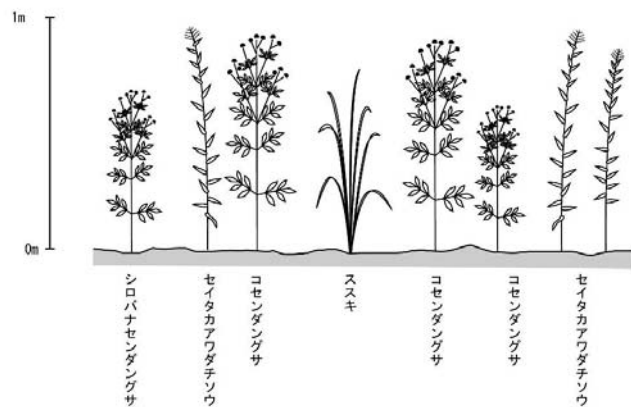
■コセンダングサ群落 (St. 1)

路傍雑草を主体とした草本が生育する群落で、造成後の裸地的環境に成立していた。調査範囲内においては、局所的にみられた。

【St. 1】

調査地点は、実施区域の市街地に隣接する造成跡地に成立した草本群落である。

秋季調査時は、群落高は 1.0m、植被率は 60%で、外来種であるコセンダングサが優占していた。このほか、セイタカアワダチソウ、シロバナセンダングサ等の外来種がみられた。



St. 1の模式断面 (秋季調査)

なお、春季調査時は、群落高が 0.4m、植被率 60%でノゲシやスギナ等の生育が確認された。また、夏季調査時は、群落高が 0.7m、植被率は 60%でセイタカアワダチソウ、ネズミムギ、マツヨイグサ等の外来種の生育が目立っていた。

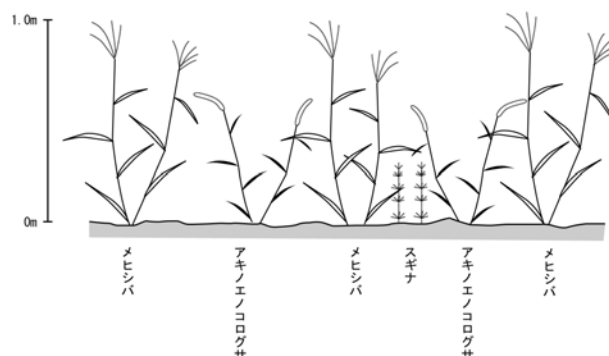
■メヒシバエノコログサ群落 (St. 2)

イネ科の一年草であるメヒシバやエノコログサが優占する群落で、やや乾いた場所に成立していた。調査範囲内においては、各所に散在していた。

【St. 2】

調査地点は、実施区域の中央部の畑地に隣接する場所に成立した草本群落である。

群落高は 1.0m、植被率は 70%で、メヒシバが優占していた。このほか、アキノエノコログサ、スギナ等が生育していた。



St. 2の模式断面 (秋季調査)

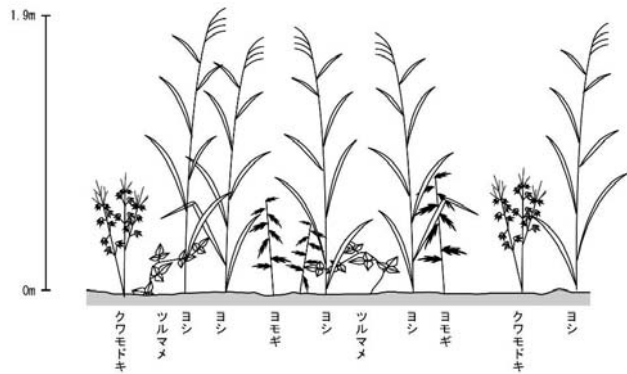
■ヨシ群落 (St. 3、St. 9、St. 10)

高茎湿生草本であるヨシが優占する群落で、比較的湿った場所に成立していた。調査範囲においては、実施区域及びその周辺地域の水田地帯の数ヶ所に分布していた。

【St. 3】

調査地点は、実施区域の水田地帯に成立したヨシ群落である。

秋季調査時は、群落高は 1.9m、植被率は 90%でヨシが密生し、下層にはツルマメ、クワモドキ、ヨモギ等が生育していた。なお、春季調査及び夏季調査では、秋季調査と比較して群落高や種構成に若干の変化はみられるが、年間を通して大きな変化はみられなかった。

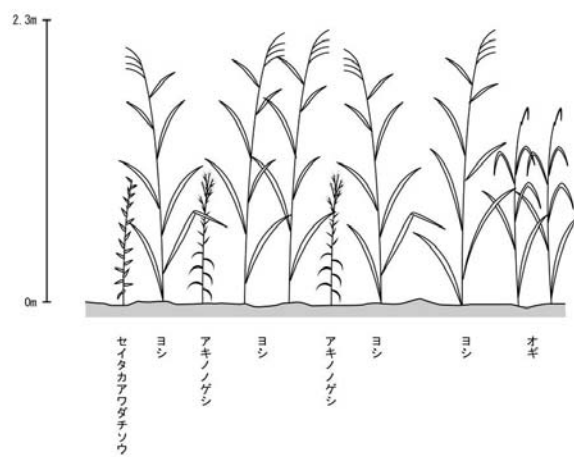


St. 3の模式断面 (秋季調査)

【St. 9】

調査地点は、実施区域の周辺地域の水田地帯に成立したヨシ群落である。

秋季調査時は、群落高は 2.3m、植被率は 90%でヨシが優占し、このほかにはオギやアキノノゲシ、セイタカアワダチソウ等が生育していた。なお、春季調査時は群落高が 0.5m、植被率 80%でヨシが優占し、夏季調査時は群落高が 2.0m、植被率 100%でヨシが優占していた。年間を通してみると、春季調査時では草刈後の高さの低い群落が、徐々に発達していく様子がみられた。

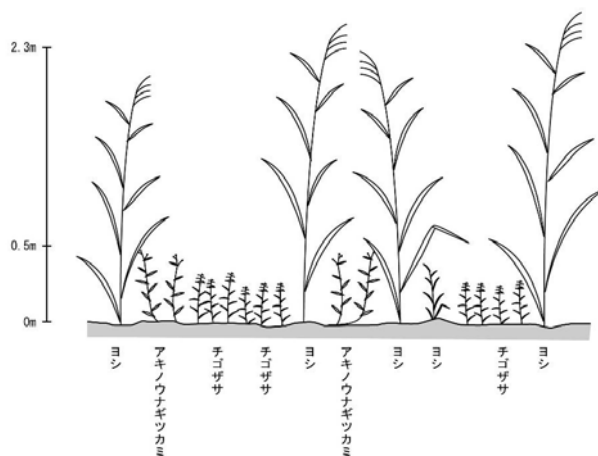


St. 9の模式断面 (秋季調査)

【St.10】

調査地点は、実施区域の周辺地域の水田地帯に成立したヨシ群落である。

秋季調査時は、群落高は 2.3mであるが、群落構造は上層と下層に分かれており、上層にはヨシが植被率 65%で優占し、下層には草丈の低いチゴザサが植被率 85%で密生していた。なお、春季調査時は、群落高 0.4m、植被率 70%で外来種のセイタカアワダチソウが優占する群落であったが、夏季調査時は群落高が 2.0m、植被率 65%でヨシが優占する群落に遷移していた。



St. 10の模式断面 (秋季調査)

以上のことから、春季にセイタカアワダチソウが優占する群落に、その後ヨシが進入し、ヨシ群落に発達していく様子がみられた。

■オギ群落 (St. 4、St. 11、St. 12)

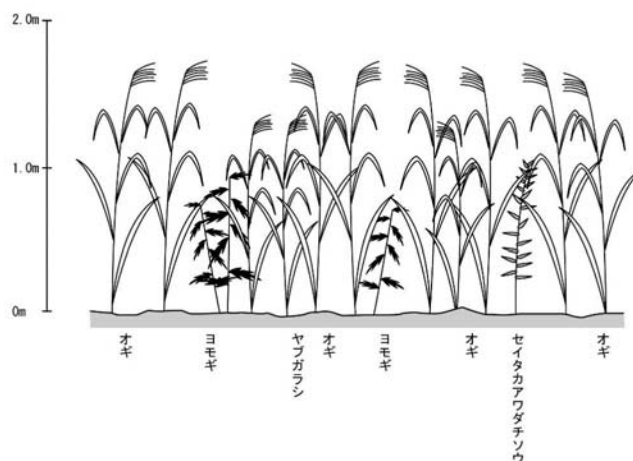
高茎草本のオギが優占する群落で、ヨシが生育する立地より、やや乾いた場所に成立していた。調査範囲においては、実施区域及びその周辺地域の水田地帯で小規模な群落为数箇所に分布していたほか、相模川沿いには面的に広がりをもった群落、笠張川の堤防法面には河川に沿って群落が成立していた。

【St. 4】

調査地点は、実施区域に成立したオギ群落である。

秋季調査時は、群落高は 1.7m、植被率は 100%であった。オギが高被率で優占していたために、ほかにはヨモギ、セイタカアワダチソウ等が数種類みられる程度であった。

なお、春季調査時は群落高 1.0m、植被率 100%でオギが優占した群落が形成されていたが、夏季調査直前に草刈が実施されていた。その後、秋季調査までに再びオギが群落を形成するまで生長したと考えられる。



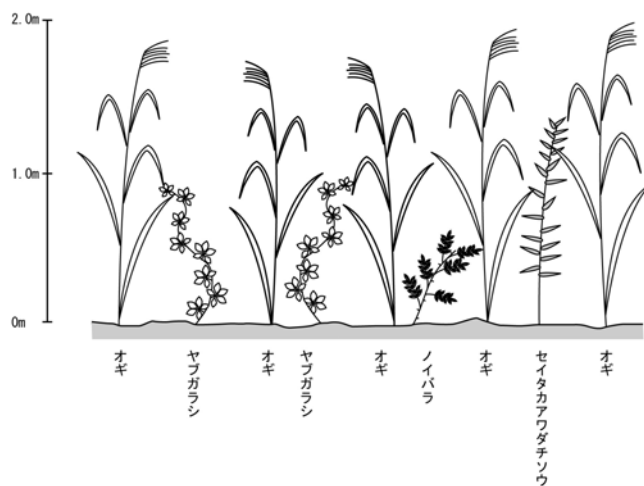
St. 4の模式断面 (秋季調査)

【St.11】

調査地点は、実施区域の周辺地域の相模川の河川敷に成立したオギ群落である。

秋季調査時は、群落高は 2.0m、植被率は 80%でオギが優占しており、その下層にはノイバラ、ヤブガラシ、セイタカアワダチソウ等が生育していた。

なお、春季調査及び夏季調査では、秋季調査と比較して群落高や種構成に若干の変化はみられるが、年間を通して大きな変化はみられなかった。

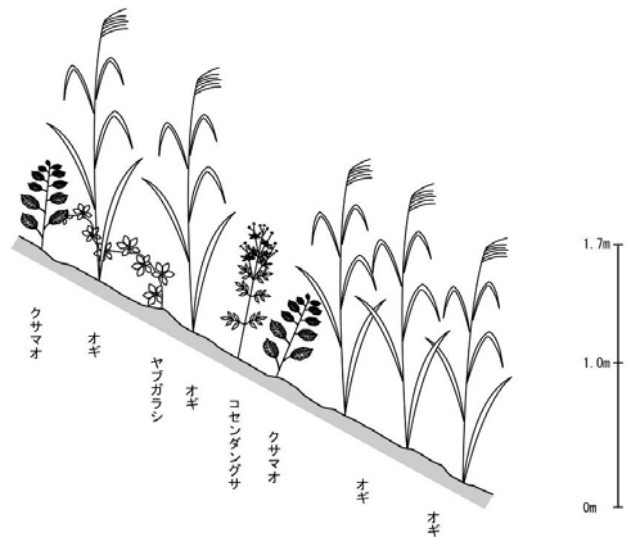


St. 11の模式断面 (秋季調査)

【St.12】

調査地点は、実施区域の周辺地域の笠張川の堤防法面に帯状に成立したオギ群落である。

群落高は 1.7m、被度は 85%で、上層はオギが優占し、下層はクサマオ、コセンダングサ、ヤブガラシ等が生育していた。



St. 12 の模式断面 (秋季調査)

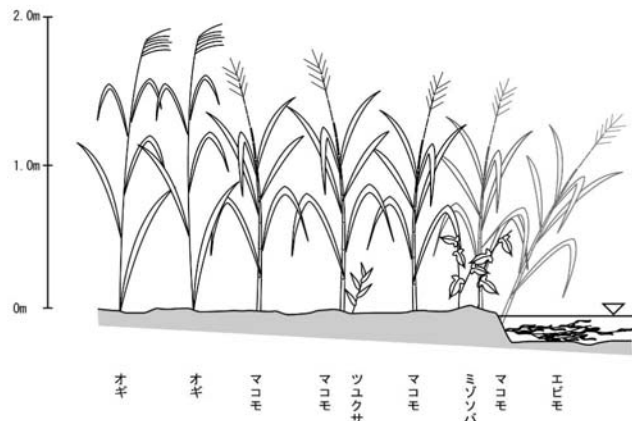
■ マコモ群落 (St. 13)

抽水植物のマコモが優占する群落で、調査範囲においては、実施区域周辺地域の西側を流れる笠張川の水際部分で数ヶ所の分布がみられた。

【St.13】

調査地点は、笠張川の水際に成立したマコモ群落で、マコモは陸域から水域への移行帯に生育していた。

群落高は 2.0m、植被率は 75%で、マコモのほかには、オギやツユクサ、ミゾソバが生育し、水中には沈水植物であるエビモが生育していた。



St. 13 の模式断面 (秋季調査)

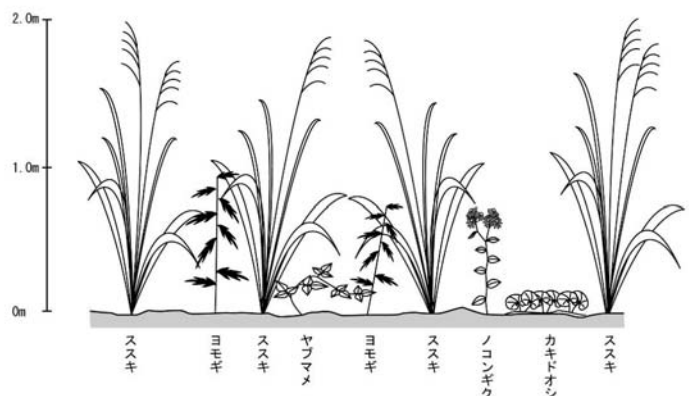
■ ススキ群落 (St. 14)

乾いた立地に生育する高茎草本の群落で、ススキが優先する。調査範囲においては、東海道新幹線の法面に帯状に成立していたほかは、小規模な群落がわずかにみられる程度であった。

【St.14】

調査地点は、実施区域の周辺地域に位置する東海道新幹線の線路付近の水田脇に成立したススキ群落である。

群落高は 2.0m、植被率は 100%で成立していた。ススキは大きな株に生長しており、下層にはヨモギ、ノコンギク、ヤブマメ、カキドオシ等が生育していた。



St. 14 の模式断面 (秋季調査)

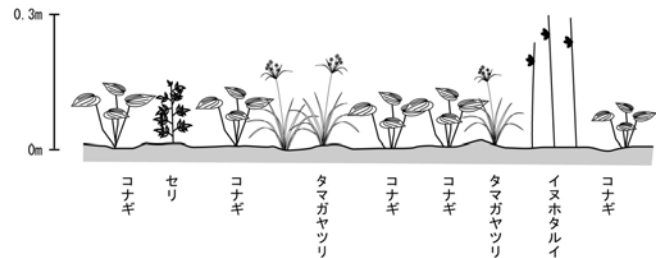
■休耕田雑草群落 (St. 5、St. 6、St. 7、St. 15)

水田雑草等の各種湿生植物が生育する群落で、耕作放棄、あるいは休耕中の水田に成立していた。調査範囲においては、実施区域及びその周辺地域の水田地帯に、数ヶ所の分布が確認された。

【St. 5】

調査地点は、実施区域西側の休耕田に成立した休耕田雑草群落である。

群落高は0.3m、植被率は85%で、水田雑草であるコナギが優占していた。ほかには、タマガヤツリやイヌホタルイ、セリといった水田内でよくみられる種類が生育していた。

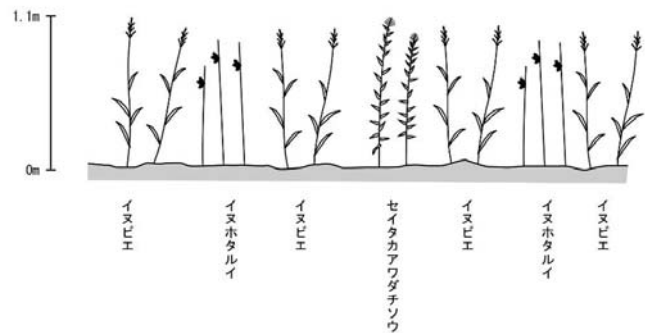


St. 5の模式断面 (秋季調査)

【St. 6】

調査地点は、実施区域西側の休耕田に成立した休耕田雑草群落である。

群落高は1.1m、植被率は80%で、一年草のイヌビエが優占していた。St. 5よりやや乾いた場所に成立しており、ほかにはイヌホタルイやセイタカアワダチソウ等が生育していた。



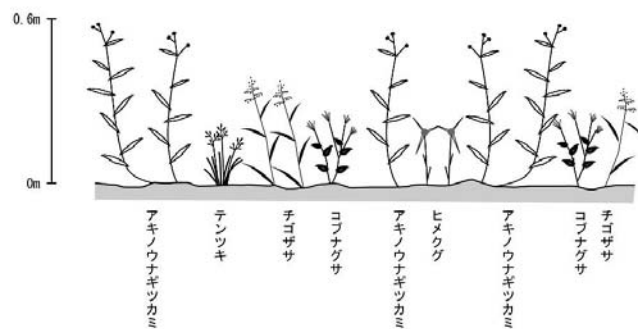
St. 6の模式断面 (秋季調査)

【St. 7】

調査地点は、実施区域中央部の水田地帯に成立した休耕田雑草群落である。

秋季調査時は、群落高は0.6m、植被率は80%で、一年草のアキノウナギツカミが優占していた。このほか、チゴザサやコブナグサ、ヒメクグ、テンツキ等の湿った場所に生育する種類がみられた。

なお、夏季調査時は、群落高0.2m、植被率90%で、アキノウナギツカミが優占していた。

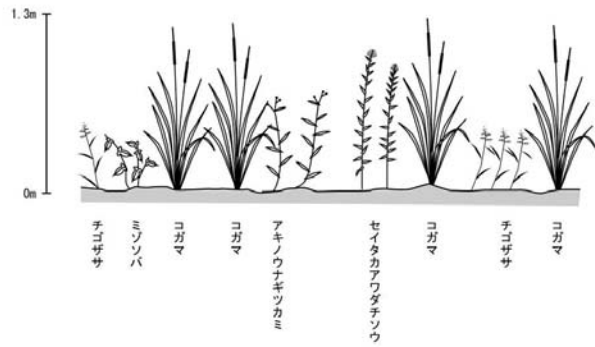


St. 7の模式断面 (秋季調査)

【St.15】

調査地点は、実施区域周辺地域の南側にみられる休耕中や放棄された水田に成立した休耕田雑草群落である。

群落高は 1.3m、植被率は 80%で、多年生草本のコガマが優占していた。また、コガマ以外では、チゴザサの被度が比較的高く、ほかにはセイタカアワダチソウやミゾソバ、アキノウナギツカミ等が生育していた。



St. 15 の模式断面 (秋季調査)

■メダケ群落 (St. 16)

メダケにより構成される群落で、調査範囲においては実施区域周辺地域の東側を流れる相模川の河川敷に成立していた。竹林 (メダケ) に隣接するように相模川に沿って小規模な群落が形成されていた。

【St.16】

調査地点は、相模川の河川敷に成立したメダケ群落である。

秋季調査時は、群落高は 4.0m、植被率は 100%でメダケが優占していた。また、メダケを覆うように、つる植物のクズやヤブガラシが生育していた。このほか、ヤイトバナやクワモドキ等が生育していた。

なお、春季調査及び夏季調査では、秋季調査と比較して階層ごとの植被率や種構成に若干の変化はみられるが、年間を通して大きな変化はみられなかった。



St. 16 の模式断面 (秋季調査)

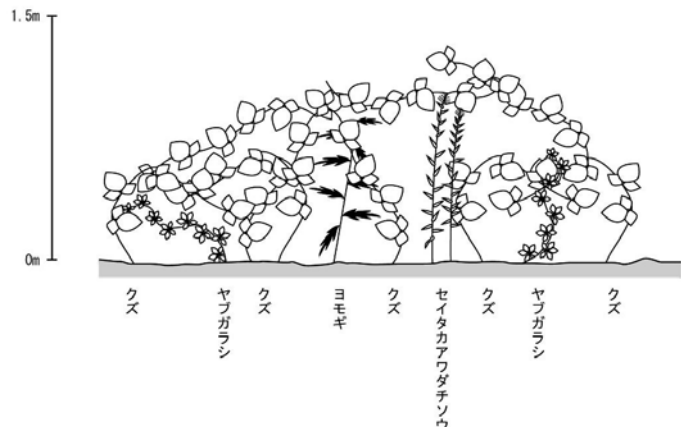
■クズ群落 (St. 17、St. 18)

長年放棄された草地等につる植物のクズが進入し、成立した群落である。調査範囲内においては、所々に散見され、また相模川の河川敷では、まとまった群落が形成されていた。

【St.17】

調査地点は、実施区域周辺地域の北側の水田地帯に成立したクズ群落である。

群落高は 1.5m、植被率は 100%で、セイタカアワダチソウやヨモギ等の上部をクズが覆うように密生していた。



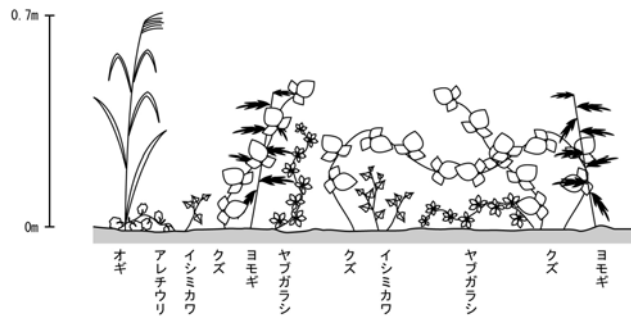
St. 17 の模式断面 (秋季調査)

【St.18】

調査地点は、実施区域の周辺地域の相模川の河川敷に成立したクズ群落である。

秋季調査時は、群落高は 0.7m、植被率は 100%で、クズが優占していた。このほか、ヤブガラシやイシミカワ、アレチウリといったつる植物のほか、オギ、ヨモギ等が生育していた。

なお、春季調査時は、群落高 1.0m、植被率 90%で外来種であるネズミムギが優占する人工草地であったが、夏季調査時には、群落高 1.5m、植被率 80%でクズやヤブガラシといったつる植物が優占する群落に変化している様子がみられた。



St. 18 の模式断面（秋季調査）

■エノキ群落 (St. 19)

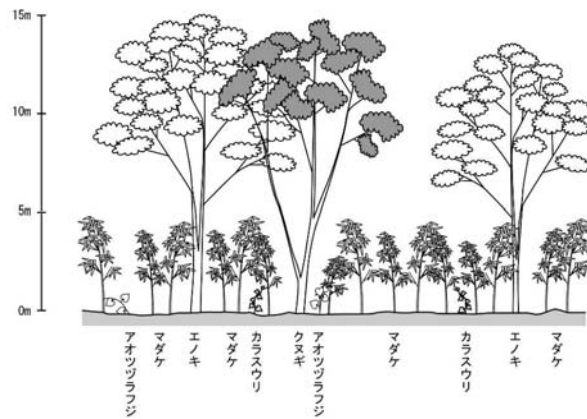
落葉広葉樹林であるエノキとクヌギで構成される群落である。調査範囲においては、実施区域の周辺地域の相模川の河川敷に小規模な群落が成立しており、また調査範囲で唯一のまとまった樹林環境となっていた。

【St.19】

調査地点は、実施区域の周辺地域の相模川の河川敷に成立したエノキ群落である。

秋季調査時は、群落高は 15mであり、高木層にエノキ、クヌギが樹冠を形成していた。また、低木層にはマダケが密生していた。そのため、草本層の種類数、植被率ともに少ない状態にあり、つる植物のアオツラフジ、カラスウリ等がわずかにみられる程度であった。

なお、春季調査及び夏季調査では、秋季調査と比較して階層ごとの植被率や種構成に若干の変化はみられるが、年間を通して大きな変化はみられなかった。



St. 19 の模式断面（秋季調査）